

# 天明六年版『宇治大納言物語』紹介・翻刻（二）

白石美鈴

本稿は、本紀要前号（第五十八号）に掲載した天明六年版『宇治大納言物語』紹介・翻刻（一）の続編である。今回は、上中下三巻の内、下巻の部分を紹介する。凡例は、前号に準じるが、次の如くである。

## 凡例

一、本文は、架蔵本版本『宇治大納言物語』を底本とした。当本は、天明六年刊大坂書房河内屋八兵衛版本である。

一、翻刻に当っては、できるかぎり底本に忠実であることを旨とし、句読点、濁点、漢字、仮名づかい、量字、ふりがな、ミセケチなどは底本のままとしたが、漢字、異体字、変体仮名は現行の文字に改めた。見せ消ち・訂正部分は、該当箇所の上に\*を付す。

一、底本にはないが各説話の冒頭に私意により通し番号を付した。和歌は、二字下げとした。本文で二・三字下げた注記の類として本文とは区別されて表記されていると思われる部分は、三字下げて記した。ま

た、底本にある二行「分かち書き」の部分は（一）を付し、脇の傍書・注記の類は、（一）に入れて、底本にあるままに付した。

一、本文丁数は、丁の終わりに（一）を付し、上中下巻の別と丁数とその表裏を（上1オ）・（上1ウ）のように記した。

一、底本にはないが、各説話間に一行分の空白を設けた。

## 宇治大納言物語下

52 いまはむかし。閑院のおとゝ冬つぎと申人の御子。内舎人よし、かど、申けり。むかしはやんごとなき人も。うとねりにぞ成給ひける。其御子に。高藤と申おはしけり。わかくより鷹をなんこのみ給ひける。高藤父のうとねり殿も。このみ給ひければ。此すゑもつたへて好給ふなるべし。甘ばかりにおはしける程に。九月ばはりに小鷹狩に出給ひぬ。山しなの。ないしやの岡をつかひる給ふに。申時ばかりに。かきくらがりて。大なる雨ふり風ふき神なりければ。人々やどりせんとて」（下1オ）

むきたる方に。みなはせちらしていぬ。此君にしの方に。人の家のみゆるに。馬をはしらせておはしね。御ともに。馬かひ男一人なん侍ける。ちいさき門のうちに入給ひね。馬を引入て。とねりおとこいたり。君は板敷にしりうちかけておはしけり。雨風まさり神なりておそろしければ。帰給ふべきやうもなし。目もくれぬ。いかにせんと。心ぼそくおぼしてゐ給へるに。あをにぶの狩衣袴きたる男の。歳四十ばかりなるが。いできて。こは何人のかくてはおはしますぞといへば。鷹つかひに出たりつるに。かゝる雨」(1ウ)にあひて。ゆくべきかたもなくて。馬のむきたるにまかせてはしらせるに。家のみえつればよろこびてきたる也。いかゞせんずるとのたまへば翁。雨いたくふらん時は。かくておはしませかしといひて。馬飼の男のもとによりて。たがおはしますぞとひければ。しかくの人のおはしますなりといひければ。其時に。けいめいしてとりしつらひ。火ともしなどすめり。とばかりありて。あやしのようにさふらへど。うちへぞおはしませ。御ぞもいたくぬれさせ給ふてさふらふめり。ほしてこそ奉」(下2オ)らめ。御馬に草かはではいかで侍らはん。あのうしろの方へ引入てなど申。あやしの家なれども。ゆへびておかしくす。みたれば。むげの物にはあらざりけれとおほして。またかくてあるべきにもあらねば入給ひぬ。あじろをてんじやうにはしたり。庭屏風をたてたりき。きよなる。かうらいべりのたみ。三えばかりしきたり。入てくるしければ。よりふしたまひぬ。御かりぎぬ御さしぬきなどとりて。翁入ぬしばかりふしてみ給へば。ひさしのかたのへり戸をあけて。十三四ばかりなる」(下2ウ)をんなの。うちこほき。すわうのきぬ一かさね。こきはかまきたる。扇さしかくして。かた手にたかつきをもちて。はぢしらひて。とをくそばみてゐたるをみれば。かしらつきほそやかに。かみのかゝりひたいつき。かやう

のもの、子ともおぼえず。いとおかしげ也。たかつきにおしきすへて。かはらけにはしをきてもて来りたりけり。まへにをきてかへりぬ。ゆくうしろで。かみのふさやかに。よをろには過たりと見えたり。又折敷に物をすへてもてきぬ。おさなけれど。さかしくもすへず。ゐざり」(下3オ)のきてゐたれば。ひめをして。こをほね。おはびほえとり。うるか。などしてまいらせたるなりけり。日いとたけがうじたるに。かくまいらまいせられたれば。すのものなれど。いかゞせんとおぼしてまいりぬ。夜もふけぬればふし給ひぬ。このありつる人の心につきておぼし給ひければ。ひとりふしたるがおそろしきに。ありつる人こゝにきてあれとのたまへば。まいらせたる。とよれとて。ひきよせてふし給ひぬ。ちかきけはひ。よそにみつるよりは。こよなくたかうなつかしうらうたし。あはれにおぼす。かやう」(下3ウ)のほどの始にてはいかにかかくはあらんとあさましくおぼえ給ければ。まめくしく。ゆく末までの事をちぎり給ひけり。長月なれば夜もながきに。露まどろまれず。あはれにおぼえ給ふまゝに。かへすくちぎり給ふ。夜もあけぬれば。出給ふとて。はき給ふ太刀を。かたみにをきたれとて。ゆめく親心あさく。人にあはすとも。人みる事すなど。いひつゝけて出もやらず。かへすくちぎりをきて出給ひぬ。馬にのりて。四五町ばかりおはする程に。御ともの人く。ここかしこより尋奉」(4ウ)りて。きあひて浅ましがりよろこひける。さて殿にかへり給ぬ。父殿。きのふ出させ給しまゝに。見え給はず成ぬれば。いかにしつる事にかとおほしあかして。あくるをそきと人いだしたて、尋給ふ程に。おはしたればうれしとおぼして。若きほどにかゝるありきする事あしき事也。我心にまかせて鷹つかひありきしを。こ殿の露けいし給はざりしかば。是もまかせてありかするに。かゝる事のあれば。いとうしろめだし。いまよりかゝるありき

なせそとて。鷹つかひ給はず成ぬ。御とも」（下4ウ）の人くも。この家をみず成にしかば。たづぬべきやうもなし。とねりおとこはいとま申てぬ中へいぬ。わりなく恋しくおもはせ給へど。人やるべきやうもなし。月日はすぐれど。恋しさはいやまさりにて。心にかゝらせ給はぬ時もし。四五年にも成ぬ。父殿はかなくせ給ひぬれば。おちの殿はらの御もとに。かよひてぞすこし給へる。おやもうせて心ほそくおぼえ給まゝには。此みし人の恋しくおぼえ給へば。めもまうけですこし給ふほどに。六年ばかりに成ぬ。此御もとにありしとねり男。あなかよりのば」（下5オ）りてまいりたりときかせ給ひて。御馬めしいで、。かはせはたけさせなどせさせ給ふ。さておまへちかくまいりたるに。此男に。一とせ雨やどりしたりし家は。覚ゆやどとひ給へは。いかゞおぼえさふらふと申ければ嬉しとおぼして。けふいかんと思ふ。鷹つかふやうにてあれとおほせられて。御ともには。たちわきなるものゝ。むつましくめしつかひけるをぐして。あみだの嶺ぐえにおはしぬ。日入ほどになん。かしこにおはしつきたりける。きさらぎの中の十日のほどなればまへなる桜ところくちりて。鶯木末」（下5ウ）になく。やり水に花ちりてなぐるゝをみる。いみしうあはれなり。ありしかどにうち入て。家主のおとこめし出せば。おもはずにおはしましたるがうれしさに。てまどひをしてまいりたり。ありし人はありやととはせ給へば。さふらふよし申。よろこびながら。おはせし所に入給へれば。木丁のうちはたかくれてあたり。見給へば。みしよりはこよなくねびまさりて。あらぬ物にてめでたくみゆ。かたはらに五ッ六ばかりのをんなの子の。えもいはずめでたきいたり。これはたそとのたまへば。うちうつぶして」（下6オ）なくにやあらんとみゆれば。はかしくしういらふる事もなければ。心えずおぼして。此家なる人やあるとめせば。父おのこまい

りゐて。ひぎにゐたり。此ちごのあるは。たれぞとい給へば一とせおはしましたりし後。人のあたりにまかりよる事もさふらはず。おさなく御物なれど。おはしましてかし後より。たゞならず成て。生れてさふらふなりといふまゝに。いみしくいよくあはれに成にたり。まくらがみをみれば。をきし太刀あり。さはかくふかきちきりなりけりと思ふも。いよくあはれにおほす事か」（下6ウ）ぎりなし。かくて其夜とゞまりて。又の日かへり給ふ。此家あるじ。なに人にかあらんとおぼして。たづねとひたまへば。此郡の<sup>くに</sup>大りやう。みやちの<sup>いやす</sup>弥益といひ侍る。かゝるあやしき物の姫なれど。さるべき。先の世のちぎりこそあらめとおぼして。又の日むしろばかりの車にしたすだれかけて。さふらひ二三人ばかりぐしておはしぬ。車よせて此女のせ給ふ。むげに人なからんもあしければ。母をめしいで、のせらる四十ばかりの女のさすがにかばかなるさましてさようのものゝめとみえたり。わか色のき」（下7オ）ぬに。かみきこめて乗ぬ。殿におはして。西の対にしつたひおろし給。また人の方にめもみやらせ給はず。見給ふほとに。うちつづき。おのこ子二人うみつ。やんごとなくおはする人なれば。たゞ成になりあがり給ふ。大納言に成給ひぬ。此の姫君は。宇多の院位におはしますに。女御にまいらせ給ふ。さていくばくもなくて。醍醐<sup>だいご</sup>の御門をばうみ奉り給へる也けり。男二人は和泉の大將と申。其弟三条大臣となん申ける。此おほちの大りやういやますは。四位に成て刑部太輔にぞ成たりける。だいごの御」（下7ウ）門位につかせ給ひければ。大納言は内大臣になり給ひにけり。いやますが家は。今の勧修寺也。むかひの東の山づらに。むばの家にはだうを立てり。其寺を大やけ寺となんいふ。此いやますが家のあたりを。あはれとおほすにやありけん。だいごの御門の御ささきは。ちかくせられたりとなん

53 いまはむかし。小松の御門の御をひ。清和天皇のみこ。位につかせたまはで。小松の宮とて。誠にひさしく人まいるよもなくてすぎさせ給。ざえもおはしまし。御心もちかしこくおはし」(下8オ) ませどもかひもなし。御子三人おはしましける。つれ／＼のまゝに。あらまし事には。位につきからば。我等いかゞ思ふべき。所望どもありなんと仰られければ。太郎の宮。さる事さふらはゞ。大貳になりて。暫にしの国を十給はらんと申給ふ。二郎は東国十五給はらんと申給ひける。たよりなくわびしきに。心きえして申給ふ。ていしの院三郎にして。我は位につかせ給はゞ東宮にたちて。御つぎをこそはじめさふらはめと申給ひき。よく申給ふとおほしめしける。されどたゞ人にて。わうじうと申たるぞかし」(下8ウ) 去程に陽成院位につかせ給ふて物にくるはせ給ふようにて。けうふしぎのまつりごとをさせ給へばすべきかたなくて。関白殿をはじめて。世はうせなんと歎きあひ給へどかなはず。いきたるものともをとりあつめてくちなはに蛙をいくらともなくのませ。猫に鼠をとらせ。犬猿などをたゝかはしつゝ。ころさせ給ふだにあるに。はてには人を木にのぼせさせ給ふて。うちころさせ給ひつゝ。いくらともなく人しぬるに。関白にて昭宣公なげきて。今はすぢなし。位をおろしまいらせんとおぼして。されぬ」(下9オ) べき宮たち。またちかき御門の御ぞうの。源氏に成給へるなどを見ありき給ふに。宮達は心えてよく見えんと。つくろひきらめきあひ給へり。つき／＼しく。いみしきを。これもわろし。是もよくもみえずとおぼして。小松の宮へまいりて。此由申させ給へば。さきかせ給ひぬとて。しばしありて入奉りて。とみに出させ給はず。けたかく物し給ふとおぼす程にぞ出給へる。ふるめき神さびて。御なをしもきたまはず。したりがほなるさまにて。何事にたちよらせ給ひたるぞとて。ものたまひたるさまも。よくおはします。位」

(下9ウ) につかせ給ひたらんにかしこくおはしましなんと見奉り給ひて。かう／＼と申給へば。いつばかりと問せ給へば。程へばあしくさふらひぬべければ。あさて日もよく侍ふ。其日とてまかで給いぬ。さて内にまいり給へれば。木に人をのほせてうちころしたるを。けうじて人々笑。われもわらひ入ておはします。いとあさまし。おとゞ申給ふ。つれ／＼に侍らへば。くらべ馬のせんとし給ふに。行幸して御覽すべきよし申給ふに。いみしうよろこばせ給ひて。いつばかりと仰らるればあさてと申給へば。よろこびて。いつし」(下10オ) かとまたせ給ふ。其日に成ぬればかんだち殿上人せう／＼まいりて。よき人々をばえりとゝめて。年老すゑあるましき人々うかうまつりて。陽成院といふ所に御輿よせておろし奉りつゝ。さて後にぞ。物ぐるはしく人をさへころさせ給て。世の失侍ひぬべければおろしまいらせつると申かけらるゝを。聞せ給ひてぞ。かなしき事かなとて。をう／＼とおめかせたまひたりける。さてやがて昭宣公をはじめ奉りて。百官引つれて。御輿ぐして小松の宮へみらせ給ぬる。めでたくいみしき御輿よせた」(下10ウ) るに。行幸には是にはのらぬものを。今一にこそこのれと仰られければ。おりさせ給ひぬるをのせ奉りてさふらへば。此御輿をもてまいりて侍ふと申させ給へば。さ仰られけるを。うへのきかせ給て。年比わびしくならひたる心に。所せくや人の思はんと。あやうくおはして。なにの輿なりとも。たゞのらせ給へかしとぞ。はせつきて申給ける。さて位につかせ給ひて。宮達の申給ふまゝに。西国東国奉らせたまへば。わろく申てけりとおほして。いと給はり給はざりけり。宇多の院位につかせ給て。けふまでその御ぞう」(下11オ) におはします。母上はきさきにならせ給ひても。御木丁のめぐりを。月に一度。ものかはんと。みそかにいひてめぐりありかせ給ひけると申侍たり。誠にや。それは小松の宮より。市に



出て物をうりかはせ給て。かくせねば。心ちむつかしきとて。しつれば心ちのよくならせ給ひけると申伝へたり

54 いまはむかし。国経の大納言と申人おはしけり。その妻にて。在原の中納言といふ人のむすめなん。えもいはず。かたちきよげにうつくしうて。大納言は歳六十よ。北のかたはわつかに」（下11ウ）廿ばかりにてそおはしける。いみしう色めきたる人にて。老たる人にぐしたるを。心ゆかぬ事にそ思ひたりきる。大納言の御をいにて。左大臣おはしける。本院にぞ住給ひける。歳廿七ばかりにて。かたちありさま。めでたくいみしき人にてぞおはしける。此おちの大納言の北の。めでたきよしをき、給ひて。ゆかしとおほしわたりけるに。其比すきもの、兵衛の佐、このまご。名はいやしうもあらざりけり。あざな平中とぞいひける。其比の人の娘。宮づかへ人。みぬなんなりけり。此大納言の妻をも。此兵衛佐忍び（下12オ）てみるといふ事をき、給ひて。誠にや。いかできかんとおほしけるに。冬の月あか、りける夜。此兵衛佐まいりけるに。何となき世のものがたりし給ふほどに。夜も更にけり。おかしきさまの物がたりのつゐでに。おとゝ近くゐよりてとひ給ふやう。こゝに申さん事かくさずの給へ。こゝら見たまふ女の中に。めでたきはたれかあるととひ給へは。いみしうかたはらいなき事なれど。我まことに思はゞ。ありのまゝにいへとおほせらるれば申なり。藤大納言の北の方こそ。世に似ず誠（下12ウ）目出度人におはすれと申に。まことなりけりとおほして。それをはいかにしてみ給ひしと問給へは。そこにさふらひし人をしてたりしが申し也。老たる人にそひたるを。いみしう侘しき事になんおもひたるとき、侍しかば。わりなくかまへていはせて侍しに。にくからずなん思ひたると侍しに。にくからずなん思ひたると侍りて。いみしく

忍びて。ふべむにみ初てなん侍し。うちとけてもえあひ侍らずときこゆれば。あしきわざをもし給ひけるかなとて。わらひの給ひける。さて心のうちに。いかで此人を見んとおほす心。」（下13オ）ふかく成まさりにければ。其後よりは。此大納言をちにおはしければ。事にふれてかしこまりきこえ給ふ。大納言ありがたくうれしく。かたじけなき物にぞ思ひ給ひける。女とらんずるをばしらでと。心の中におかしく覺しける。かくてむ月に成ほどに。三日が間まいらんと給ひけるよしを。大納言き、給ひて。家を作みがき。御まうけをなんし給ひける。正月三日に成て。さるべき殿上人上殿部ひきぐして。此大納言の家におはしければ。よろこび物にあたり給事かぎりなし。あるまじなごまう」（下13ウ）けたるなど。げにことほりとみゆる。さるうちくだるほどに日暮ぬ。うたひあそび給ふ事おもしろく。そゝろ寒きまでめでたし。此おとゝ。御かたちよりはじめ。すぐれ給へる御ありさまの。よのつねならずめでたうおぼすれば。萬の人、めをつけたてまつりみ奉る事いみし。北の方は。おとゝのおはするそばの方よりのぞき給ふに。おとゝのかたちけはひ吹いる、にほひより初。人にすぐれ給へるを見給ひて。我身のすぐせこゝろうくおぼゆ。いかなる人。かゝる人にそひてあらん。歳老ふるくさ」（下14オ）き人にぎしたる。事にふれてわびしくおぼゆ。身のをき所なく。心うくあんじゐ給へるに。此おとゝかくうたひあそび給ひて。此すだれの方をしりめに見をこせ給ひ。はづかしげにいはんかたなく。すだれのうちさへわりなく。ほゝゑみて見をこせ給ふも。いかにおぼすらむといとゞはつかし。かゝる程に。夜やうくふけゆくに。皆人えいになり。ひもときかたぬぎて。舞たはふれ給ふ事かぎりなし。帰り給ひなんとする程に。大納言申給ふは。御車をこゝにさしよせて奉れ。いたくゑはせ給ひにたりと」（下14ウ）申給へば。いみしくびんなき事。い

かでさる事侍らむ。いたくゑひなば。此殿にこそ侍らめ。忽ちひさめて  
まかり出なるとの給ふ。ことかんだちめも。きはめてよき事なりとて。  
たゝよせに。御車ひかくしのもとによせさするほどに。引出物にいみし  
き馬ふたつ。目出度御琴などとり出たるに。おとゞ。大納言にかくけう  
糸のために参たるを。誠にうれしと申給ふ。かゝるゑひのついでに。し  
れ事申はびんなき事にてさふらへど。おぼさは。かぎりなくやむ事なか  
らん引出物をこそ給らめとの給へば。大納言。いみしう」(下15才)ゑ  
ひたる心もめいよくあり。うれしくおほゆるにかくの給へる。我身は。  
此ぞひたる人をこそいみしくおほゆれ。おとゞにおはすとも。かばかり  
の人は。えやもち給はあらん。しりめにかけて。みすの中を常に見やり  
給ふるも。わづらはしくはおほえつ。おなじくは。かゝる物もちたりけ  
るともみせ奉らんかしと。酔ぐるひたる心なれどおぼして。おきなのも  
とにはかゝる物こそさふらへ。是を引出物にまいらすとて。屏風をし  
たゝみて。すだれよりをしりて。北の方の袖をとりて引きよせて。こ  
れにさふ」(下15才)らふと申給へば。誠にまいりたるかひありて。い  
まこそうれしく侍れとて。おとゞよりてひかへ給ひぬれば。大納言たち  
のきて。こと殿原を。いまは出給ひぬ。おとゞはとみにいで給はしとの  
さまへば。上殿部めをくばせ。ひちをつきて。あるひは出給ひ。或はた  
ちかくれて。いかなる事ぞみはてんとおぼす人もあり。おとゞ。いまは  
誠にいみしく酔たり。車よせよ。すちなしとの給ふ時に。御車庭に引出  
したるを。人ゝさととりてさしよせつ。大納言よりて。御車のすだれもた  
げ給ふ。おとゞ北の方をかきいだきて。車にうちのせて。や」(下16才)  
がて。つゞきて乗給ひぬ。大納言。すじなくてや。をんななども。我な  
わすれそとなんいひかけ給ひける。忽ちやり出させて出給ひぬ。大納言  
内に入て。装束をときてふし給ひぬ。いみしくゑひにければ目くるめ

き。心ちあしくて。あかつきがたにやうく醒て。夢のように見しこ  
とゞもおほゆれば。ひが事にやあらんとまでおぼして。女房に。うへは  
とどひ給へば。ありしやうをかたるに。いみしうあさましう。うれしと  
いひながら。物にくるひにけるこそ。酔の心といひながら。かゝるわざ  
する人があると。おこにもたえがたく。」(下16才)かたゞ思へとも。  
とりかへすべきやうもなし。女のさいはひのするなめりとおもふにも。  
我を老たりとおもひたりしきそくのみえしも。ねたぐくやしく。かなし  
く恋しく。人めにぞ。心としたる事とおもはせて。心のうちには。わり  
なく恋しくなんおほしける。左のおとゞは。我もとにあておはして。對  
にしつらひすへてすみ給ふに。こゝはとみゆる所なく。いみしくなんお  
ほしける。北の方の心には。年比の人をむつかしとおもひつるに。かゝ  
るめでたき人にそひてあるを。我身のすぐせかしこくおもひける。も  
と」(下17才)人は。我をわりなく心ざし思ひたりしをぞ。あはれとお  
もひ出られける。平仲も老のむつかしさにこそ。なぐさめにわりなくし  
てあひしりつれ。かゝる人にそひにたれば思ひ出べきにあらぬに。又我  
をば色めきとみ給やらん。ひまもなくもてなし給へれば。何事にもかく  
しも身もてなすべきにもあらず。かくてある程に。うつくしげなるおの  
こゞうみつ。その子中納言に成て。本院の中納言あつたゝと云は此人な  
りけり。誠にわすれにけり。おとゞ北の方車にのせ給しほどに。下かさ  
ね」(下17才)のしりとりて。御車にいるゝやうに。平仲よりて。かき  
つけて。をしつけてさりにけり。おとゞみ給はず成にけり。北の方また  
みけるに。袖の下にみちのく紙をひきやりてをしつけたるを。あやしと  
おもひてみれば忍ぶる人の手にて

物をこそいはねの松の岩つゝ、じいはねばこそあれ恋しき物を  
となんありける。車にのりしほど。下がさねのしりに入しは。是にこそ

有<sup>レ</sup>けれとおほしける。又ある人のかたりしは。若<sup>レ</sup>君のかい<sup>レ</sup>に書て。母に見せ奉れとてやりらりけるとも申す

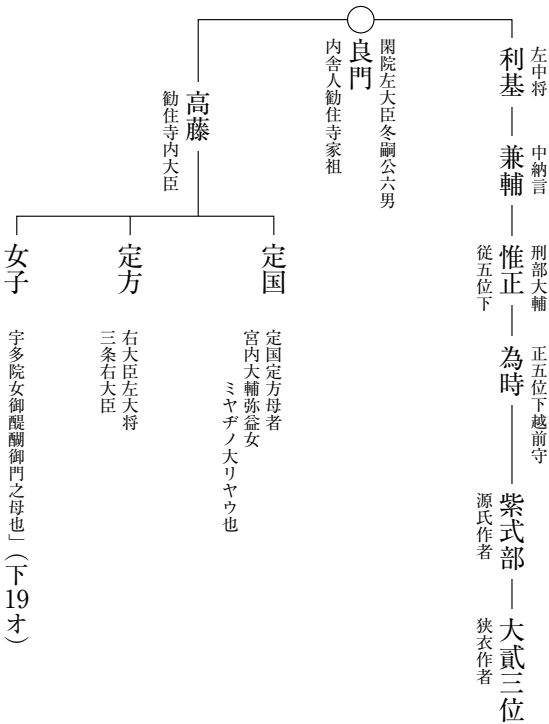
昔せし我かね<sup>レ</sup>ごのかなしきはいかに契りし名残成けん」(下18才)  
此哥こそ。ちごのかい<sup>レ</sup>に書て。母にみせ奉れといふに。若君見せけり。女いみしくなきて。又かい<sup>レ</sup>にかきて返し

うつゝにてたれ契けん定なき夢ぢにたどる我は我かは

写本云

有<sup>アリ</sup>二<sup>ウ</sup>宇治拾遺<sup>シフイヲコナハル</sup>一行<sup>ヨニコレコノモノカタリイマダアラ。ネリハムルコトシニ</sup>世這箇物語<sup>スレ</sup>未<sup>ス</sup>有<sup>コノ</sup>鏤<sup>ミチナサウワサ</sup>梓<sup>サハ</sup>是<sup>クハ</sup>  
故<sup>ユヘ</sup>乞<sup>コイ</sup>二<sup>ニ</sup>假<sup>カヅテ</sup>或家<sup>アルイヘニ</sup>所<sup>トコロノ</sup>秘<sup>ヒスル</sup>之本<sup>ホンヲ</sup>使<sup>テ</sup>二<sup>ニ</sup>満直膳<sup>ミチナサウワサ</sup>間<sup>マ</sup>多<sup>タ</sup>二<sup>ニ</sup>舛<sup>クハ</sup>  
差<sup>シヤ</sup>一<sup>一</sup>只追<sup>ツヅク</sup>二<sup>ニ</sup>陶靖節<sup>トウセイセツノ</sup>之遺風<sup>イフウヲ</sup>不<sup>モトス</sup>求<sup>ハナハタカイシ</sup>二<sup>ニ</sup>甚<sup>シハク</sup>解<sup>コトナ</sup>一<sup>一</sup>俟<sup>タ</sup>二<sup>ニ</sup>侘<sup>タ</sup>  
日<sup>シツ</sup>一<sup>一</sup>要<sup>ヨウ</sup>レ<sup>スト</sup>考<sup>カンカウルコトヲ</sup>二<sup>ニ</sup>同<sup>トウ</sup>異<sup>イ</sup>云<sup>イフ</sup>爾<sup>シカ</sup>」(下18ウ)

高藤系図



天明六年丙午春求版校正

大阪書房

河内屋八兵衛」(下19ウ)

## 書林

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

同芝明神前

岡田屋嘉七

同中橋廣小路

西 宮弥兵衛

同浅草茅町二丁目

須原屋伊八

大阪南久宝寺町心齋橋南へ入

堺 屋新兵衛

同順慶町心齋橋南へ入

堺 屋定七（下20才）